

明治初年、六甲山ははげ山だった。今、私たちが市街地から眺める緑豊かな山容からは想像もできない。しかし明治14年、わが国を代表する植物学者、牧野富太郎博士は、土佐から初めて東京へ行く途中、六甲山を見て、随想『東京への初旅』に書いている。

「私は瀬戸内海の海上から六甲の禿山を見て、びっくりした。はじめは雪が積もっているのかと思った」と。荒廃した主な原因は、安土桃山時代に豊臣秀吉が大坂城築城のため

はげ山だった六甲山

先人が築いた人工の森

に大量の太木・石材を伐り出し、その見返りに「草木採取勝手たるべし」と布令したことによるといわれている。

明治33年、コレラなどの伝染病の流行から上質な水を供給する目的で、六甲山には布引貯水池が建設されたが、大雨のたびに流入する土砂に悩まされ、町も度重なる洪水に大きな被害を受けていた。それで水源涵養と砂防のための植林が明治35年、六甲山系の一角をなす再度山を中心とする地域で始められた。したがって、今、私たちが登り、眺める六甲山は、先人たちが岩と砂の山に万里の長城のような砂止めの石垣を築き、一本いっばん苗木を植えてき

野元 正



のもと・ただし作家。造園家。

元神戸市職員。昭和

20年、東京都生まれ。京大農学部卒。平成6年、『氷の箱』で第1回神戸ナビル文学賞佳作賞、21年『銚子の窓』で第3回神戸エルマール文学賞などを受賞。

た、人工の森なのだ。

初植林から約半世紀、昭和初期の六甲山や日本アルプスを舞台に、新田次郎は単独行の登山家、加藤文太郎をモデルに『孤高の人』を書いた。その冒頭は、神戸市街地を望む高取山の山頂から始まる。彼は、神戸の町から見た六甲山の春秋を「色が踊る」緑豊かな山々として、会話の中で登場人物に語らせている。

ところで、六甲山にはトウエンテイクロス、シュラインロード、シェールロード、カスケードバレー、アイスロードなど横文字の登山道が多い。神戸居留地の外国人がつけた名

前だ。彼らは出勤前に毎朝、背山に登り、休みの日はハイキングや軽い登山をするなど季節の折おりにレクリエーションを楽しんだ。

その外国人のまねをして登ったのが、今日でも市民の間に盛んな「毎日登山」だ。「毎日登山発祥の地」の碑のある再度山の善助茶屋（現在は碑のみ）では音楽を聴き、紅茶やトーストなど欧風の朝食も用意されていたと聞く。その辺に庶民の隠された楽しみがあったのかもしれない。

また陳舜臣の『神戸ものがたり』

砂防植林が行われた明治36年頃の再度山

(神戸市蔵)

の「布引と六甲」には、外国人の毎日登山の「習慣」と、隠された本当の楽しみとして布引茶屋のスリーグレーセス（三美人姉妹）に会うために毎朝早起きして山に登ったという恋物語が紹介されていておもしろい。欧州人は日常を巧みに楽しみに変えようとする。私たちが人生を謳歌するために、人を恋し、山に登ろう。しかし、六甲山は油断したら、怖い山だ。日常鍛錬や準備は怠りなく楽しもう。

今年もいよいよ紅葉の季節。六甲山の紅葉は山本周五郎の『須磨寺付近』や山崎豊子の『華麗なる一族』にも出てくるが、私は紅葉の中の「湖」をお薦めしたい。生田川の源流の「瀬池」や摩耶山に近い「穂高湖」。保久良山から金鳥山を経てその奥の風吹岩近くにある「雄池」などは、「隠れ湖」のような感じがして、紅葉を映した静寂の中で、ほっとしたひとときを過ごせると思う。

緑豊かな六甲山にする植林は、今年で約110年が経過したが、最後にこの努力は国、兵庫県、神戸市など行政の力だけでなく、「毎日登山会」の植林活動など、山を愛する多くの市民が参加して行われてきたことを書いておきたい。まさに六甲山は市民とともにある「市民の山」だ。

しかし、人工の森が安定するには、人の手を借りながらあと100年かかる。阪神・淡路大震災でも厳然と存在し、被災者の心のよりどころとなった六甲山を立派に子孫に引き継いでいくことが、今を生きる私たちの務めだと思ふ。

